



## 2. オオヒカゲ

地味チョウシリーズの2番バッターはオオヒカゲオオヒカゲはその名の通り大きいヒカゲチョウ。その辺のヒカゲチョウの仲間を蹴散らかし本当にデカイ。その割には気の効いたデザインは無い。裏の目玉模様が並んでいるくらいで、大きなキャンバスを無駄にしている絵図らだ。なのであまり人気は無い（と思う）。これがヒメジャノメくらいの大きさに草原をチョコチョコ飛んでいたなら、案外かわいいのかもしれない。とにかくちょっと大きすぎるのがいけないのだ。本人はそんなこと気にせずふわふわと飛んでいる。世の中に出てくるのも夏休みに入ってからと、ちょっと遅めだ。とにかく我が道を行くという感じがなかなかいいと思う。

そんな愛すべきチョウに関するエトセトラを綴っていくことにしましょう。



# 生活史編 卵・若齢

オオヒカゲの生活史を図鑑にのせる時に、お世話になったフィールドが旭川にありました。旭川勤務時代によく通った倉沼地区の湿地です。今は荒れ果ててしまいましたが、とにかくオオヒカゲがわんさか飛んでいました。その周辺はカバイロシジミやリンゴシジミもいて、図鑑に載っています。8月に行くと、そこに生えているスゲ類の葉には卵がたくさんついていました。へえーっ、これがオオヒカゲの卵か。たしかにバイブルの生態図鑑に載っていたよな。きれいに並んだ卵から孵化した幼虫たちも体を寄せ合って並んでいます。面白い面白いと幼虫たちを追いかけてみることにしました。



きれいに並んだ卵 (旭川 2010・8・13)



1 齢幼虫 (2010・9・7)



2 齢幼虫 (2010・10・9)



# 越冬を追いかける①

夏に産卵された断卵から孵化した幼虫は9月から10月にかけてゆっくり成長します。9月7日には2齢になり始め、幼虫たちは分散していきました。10月17日にはほとんど3齢になりました。雪虫が飛び始めます。そろそろ霜が降り、雪が積もるぞという知らせのようです。霜が降り、氷点下の世界にはいると食草は枯れ始めます。幼虫はどうなっていくのだろうと、倉沼のフィールドに通い続けました。

2010年の気象データを見ると写真の10月17日の最高気温17.5℃、最低6.2℃でした。下の写真の11月21日は最高13.1℃、最低-1.3℃。11月27日は最高3.1℃、最低-3.3℃でした。初雪は10月27日だったようです。幼虫をよく見ると枯れた葉にいるのは少し色が薄くなっているようでした。ここまで来たら越冬中も見なくなってきました。



3 齢幼虫 (2010・10・17 雪虫飛ぶ)



枯れ始めた食草上の3 齢幼虫 (2010・11・21)

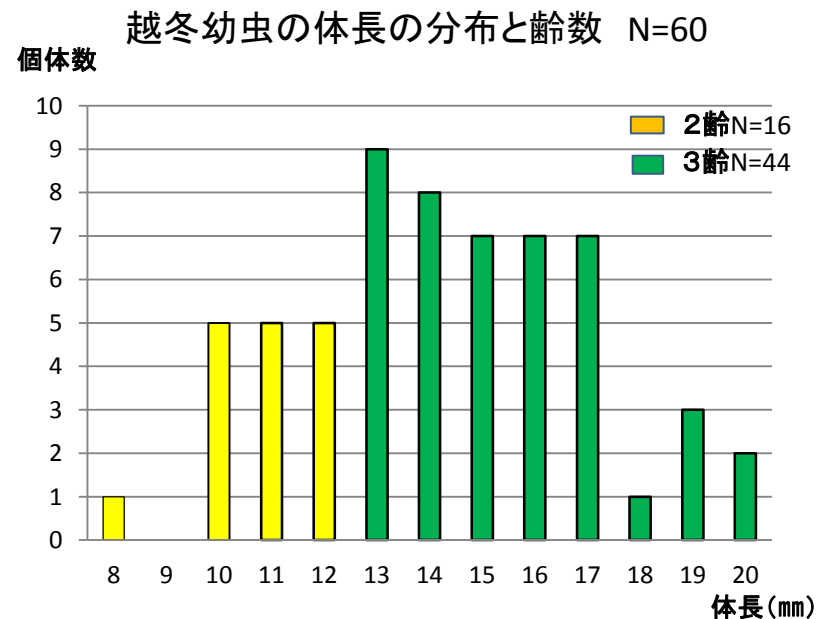


食草は霜がおりてすっかり枯れてしまった。(11・27)



# 越冬を追いかける②

12月に入ると降るものは雪になることが多くなり、根雪になっていきます。根雪になったのは12月6日のようです。よーし、雪の中の幼虫を観察するぞと、12月25日のクリスマスの日にガッチリ着込んで出かけました。積雪は18cm。道路わきの水路沿いのスゲの雪を根掘りで少しずつ崩していきました。すると越冬前11月に観察したところから動いていないようで、スゲの枯葉の上で次々に見つかりました。まあそうですね。無駄な動きはせずにひたすら雪の下で春を待つのでしょうか。この日はクリスマス寒波で最低気温が-14.7℃になったようです。昼間は晴れてく暖かそうに見えますが…最高気温も-4.0℃です。ただ雪の下はそれほど気温は下がりません。富良野で雪の下の地表温度を測定したのですが、外気温が-20~30℃のときも-1℃前後で推移していました。越冬前のこの子たちの体長を測定しておきました。2~3齢で体長は10~20mmというところでした。(グラフ参照)





# 越冬を追いかける③

年を越しました。まだまだしばらくは蝶屋も越冬です。この年の旭川はそれほど厳しい冬ではなかったようです。最低気温は1月28日に $-20.7^{\circ}\text{C}$ を記録し、最大積雪深は2月8日の67cmでした。4月に入り8日に根雪ゼロになりました。雪が解けて来て4月6日に出動しました。右の写真は雪の中の幼虫を観察した道路わきです。スゲ類は雪の重さでペタッと地面に張り付いて、倒れていたササが少し起きてきた感じです。注意深く重なった葉をめくっていくと幼虫が出てきました。おお、4か月ぶりの再会です。その後はヒメギフが飛び始めた4月25日にも行ってみました。下の写真を見るとスゲ類の新芽が伸びはじめていますね。奥の方のスゲ群落で探してみると。もう食痕がありました。食べ始めています。いよいよ活動開始。これから7月までモリモリ食べて大きく育っていくのですね。



越冬後の様子 (2011・4・6)



枯葉にいた幼虫 (同左)



越冬後の様子 (2011・4・25)



新芽を食べる3歳幼虫 (同左)



越冬後の様子 (2011・5・3)



新芽に2頭 (同左)

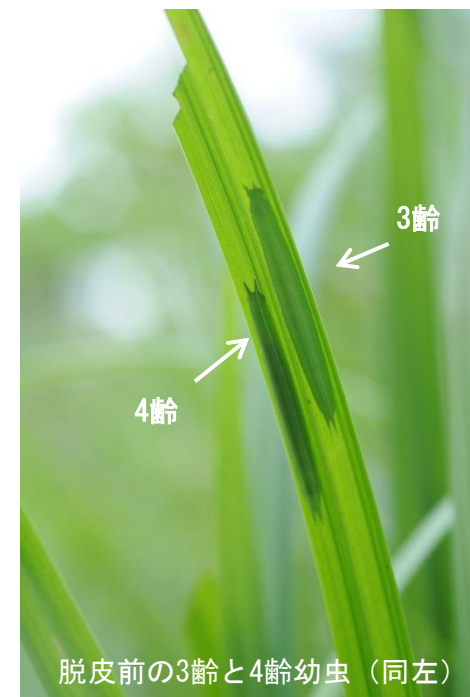


# その後も追いかける

6月に入ると食草も伸びてきて葉も大きくなり、食痕が目立ってきます。6月4日にはほとんどが4齢になって、6月17日にはほとんどが終齢になっています。幼虫自体はスゲの葉脈に似せて細長くよく見ないと見過ごしてしまいますが食草の先端が斜めカットされるので、これを目当てに探すと見つけやすいです。下の写真は奥の方のスゲ群落ですが4頭います。幼虫を見ていていつも思うのですが、頭と腹端がそっくりです。体の前後が同じような形態なのですが、何か意味があるのでしょうか。体長も60mmを越え、葉が幼虫の重さで垂れ下がることもあります。この頃食草が開花します。そこで葉が付いた株を押し花にして知人の専門家に同定してもらうことにしました。道端の方がオオカワズスゲ、奥の方の群落がヒメゴウソと判明しました。もう1種背の高いのはオオカサスゲだと思いますがスゲ類は素人には難しすぎます。



食草群落の様子 (2011・6・4)



脱皮前の3齢と4齢幼虫 (同左)

食痕と幼虫たち (2011・6・4)



終齢幼虫 (2011・6・17)



食草ヒメゴウソの群落





# 蛹化そして羽化

倉沼のオオヒカゲ通いも最終盤です。やはり羽化まで見届けなくてはなりません。ちょっと間が空いたのですが7月11日に行ってみると、奥のスゲ群落の方ですが蛹があちこちにぶら下がっていました。食草の方にも付いているのですが、がっしりしたヨモギの株の方に移動して鈴なり状態です。ざっと数えて110個。そのうち29個が黒っぽく変色して寄生されたようです。残念ながら前蛹はもう見当たりませんでした。16日の朝早起きして行ってみると次々羽化してました。それにしてもこの群落での大量発生はちょっと異常のようです。ピカピカの成虫を標本にしましたが、標本箱のスペースを食うので数頭にとどめました。このフィールドで冬をまたいで1年間に16回も通ってしまいました。楽しい出会いでした。



ヨモギに鈴なりの蛹 (2011・7・11)



食草にぶら下がる (7・11)



羽化近い蛹 (7・12)



寄生された蛹 (7・11)



羽化 (2011・7・16 6:20)





# 成虫編

オオヒカゲはちょっと湿ったところが大好きです。食草が湿性草原のスゲ類に依存しているからなのでしょう。ただ、成虫は発生地から抜け出していろんなところを出てくるようで、ときどき写真のように樹液に来ることもあります。でもなんだか他のタテハチョウの仲間にくらべ不似合で申し訳なさそうに食事しているように見えます。林縁のササ原にもよく飛んでいてそういう時はなかなか止まりません。オスは特にそうで止まったとなあとゆっくり近づいても、なぜか敏感に察知して、たいてい逃げ去ってしまいます。写真撮影にはけっこう厄介な蝶なのです。



やっと止まってくれた。そーっと近づいて撮影



ふわふわ羽ばたくように飛び



ミズナラの樹液を吸いにきた。(2022/7・26 富良野)



# 成虫編 産卵行動

オオヒカゲの産卵を、ずーっと追いかけているのですがなかなかお目にかかりません。相棒も安平方面のマイフィールドで狙っているのですが、「完本」にも「フィールド版」にも載せることができませんでした。やっと出くわしたのが2020年。小雨が降る旭川近郊の疎林です。林縁には少し幅広のスゲの仲間がたくさん生えています。食痕もたくさん残っています。メスがなんだかそわそわ(?) 怪しい動きです。草むらに入っていきます。これは産卵しそうだと粘っていると、草むらの奥の方で産卵が始まったみたいです。手前のイタドリをそーっと動かしてのぞいてみると腹を曲げているメスが見えました。あわててシャッターを切りました(写真1)。と、気づかれたか産卵を止めてしまいました。もう少し待ってみるしかない。今度は10m先の方で怪しい動き。ゆっくり近づいてシャッターを切ります。よしよし産んでいます(写真2)。飛び去ったので葉の裏を見ると卵が4つだけ並んでいました。産卵もけっこう人目を気にしているようでした。



小雨の中も活動する♀ (旭川 2020・8・10)



いやあ、そんなややこしい所で産卵か (写真1)



ぎりぎり近づいて撮影 (写真2)





ということで地味チョウシリーズ第2弾はオオヒカゲでした。こんどは配偶行動を見てみたいなあと思っています。止まっているメスにオスがやって来て翅をパタパタやるそう  
な。どこかいいフィールドは無いかなあ。 2025年11月  
記

